



沖縄国際大学 平成 24 年度 FD 支援プログラム成果報告書

下記内容により、FD 支援プログラムの取り組みが完了いたしましたので、「FD 支援プログラム成果報告書」にて、ご報告いたします。

報告者氏名	仁野平 智明 	所属・職名	総合文化学部日本文化学科・教授
プログラム名称	ライティング・センターにおける TA の活用		
実施及び成果の要旨	<p>日本文化学科では、学生の文章作成能力の向上を目指し、「基礎演習 I」（現在は「リテラシー入門 I」）のカリキュラムを改善し、また、ライティング・センターを設置して、TA からの文章作成指導を受けられるよう工夫を重ねてきた。しかし、TA からの指導は、機会的・個別的なレベルにとどまっているのが実情である。そこで、TA による文章作成指導に関する示唆を得るべく、早稲田大学ライティング・センターを視察した。</p> <p>同センターについての説明を受け、模擬セッションを見学し、セッション担当者からの話を聞いた。そこで確認できたのは、あくまでも自立した書き手の育成を旨としていること、対話の中から書き手が自分で問題点を明確化することを促すよう心がけている、ということである。また、具体的アプローチ法について学ぶことができたのも、大きな収穫であった。それは次の 5 点である</p> <p>しかし、その一方で、本学科ライティング・センターの限界も感じた。今後は、人的資源の面や指導の継続性の面から、全学的組織としてライティング・センターを設置する等の方策を考える必要があるのではないだろうか。</p>		
実施期間	自：平成 24 年 10 月 3 日 至：平成 24 年 10 月 3 日		

※共同実施者（2 人以上の場合は、別紙添付のこと）

申請者氏名	田場 裕規  印	所属・職名	総合文化学部日本文化学科・准教授
申請者氏名	印	所属・職名	

<p>目的</p>	<p>ライティング・センターにおける TA 活用のため、ライティング・センター運営及び TA 指導に関する知見を得る。</p>
<p>活動内容</p>	<p>日本文化学科は、学生の文章作成能力の向上を目指して、学科必修科目「基礎演習 I」（現在は「リテラシー入門 I」）のカリキュラムをライティングスキルの育成を中心とした内容に改善した。また、それに伴ってライティング・センターを設置し、TA による文章作成に関する個別指導を行っている。しかし、TA による指導は、授業担当教員の経験によるところが大きく、体系立った指導とはならないままに機会的・個別的なレベルにとどまっている。</p> <p>そこで、本学科ライティング・センターでの指導に関する示唆を得るべく、当該領域における先進的取り組みが高く評されている早稲田大学ライティング・センターを視察した。同センターの佐渡島沙織准教授から、センター設置の経緯や運営方法等に関する説明を受けた後、見学者用に設定された模擬セッションを見学、さらには、セッションを担当したチューターから、直接に話を聞くことができた。</p>
<p>成果・結果・効果</p>	<p>ライティング・センターにおける指導は、あくまでも自立した書き手の育成を旨としており、当面の文章の完成を目標とするものではないとのことであった。これは、本学科ライティング・センターにおける指導方針と共通するものである。そして、そうした指導とするために、対話の中から書き手が自分で問題点を明確化することを促すとのことであった。この点は、本学科の TA 指導において不徹底だった要素であり、大いに参考になった。また、具体的アプローチ法について学ぶことができたのも、大きな収穫であった。それは次の 5 点である</p> <ol style="list-style-type: none"> ①書き手が独りになったときにも文章の修正ができるように指導する。 ②添削をしない。代わりに書かない。 ③書き手が気付くように、質問する。 ④書き手に会話の主導権を握らせる。 ⑤ヒントや修正の選択肢を示し、書き手が決める。 <p>これらの指導・支援の理念及びセッションのノウハウは、センター担当教員からのチューター指導によってその土台が作られたのであるが、複数年にわたってチューターを務める大学院生が数多くおり、先輩から後輩へチューター間での指導が可能であることによって、より充実したものとして確立したとのことであった。</p>
<p>今後の展望</p>	<p>卒業論文を 4 年次全員に課している日本文化学科は、必須のリテラシーとして「アカデミック・ライティング」が強固に位置づいている。そのために TA を活用したライティングスキルの養成を中心に据えてカリキュラムの改善を図った。そのことによって「リテラシー入門」は一定の成果を得ることができた。また各指導担当教員が共通シラバスを用いて焦点を絞った指導を行ったためカリキュラムの平準化を図ることができた。課題は、初年次に培ったリテラシーを段階的に伸張することにあるが、そこにはいくつかの課題が挙げられる。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①「アカデミック・ライティング」に対応できる TA の養成及び研修の確保。 →毎年 TA が変わるので毎年一から TA を育成しなければならない。 ②学科単体でのカリキュラムでは指導担当教員の負担（TA の事前指導、リフレクション等）が増加するため永続的に継続させる方策を見出さなければならない。 →学科単体のライティング指導ではなく全学的に組織的な体制を整えて学科を疲弊させることなく永続的な指導を見出したい。